提言書 2026

AI時代、高専生は
企業と地域の「つくる力」になる

高専生と歩んだ14年間からの提言

2026年11月

高専ベンチャー株式会社 代表取締役

澤木陽太郎

発行：高専ベンチャー株式会社

https://kosen-venture.com/

目次

はじめに

第1章　高専とは何か――15歳から「つくる」を学ぶ学校

第2章　14年間の現場で出会った高専生たち

第3章　AI時代に、なぜ高専生が強いのか

第4章　それでも、力が生かされていない理由

第5章　5つの提言

第6章　高専ベンチャーがこれから取り組むこと

おわりに

著者紹介

出典

2026年11月
高専ベンチャー株式会社 代表取締役　澤木陽太郎

はじめに

2012年3月、5人の現役高専生が、2週間の開発合宿を行いました。

合宿でつくり上げたものと、その取り組み方を知って、私は正直に言って衝撃を受けました。彼らの技術力は本物でした。教えられたことをこなすのではなく、自分で調べ、手を動かし、原理から考えてものをつくる。夜遅くまで画面に向かい、うまく動かなければ朝までかけて原因を探していたと聞きました。

一方で、気になったこともあります。都市部の学生に比べて、外の世界とつながる機会が少ない。そのせいか、これだけの力を持ちながら、経験に裏打ちされた自信を持てずにいるように見えたのです。「自分なんて、まだまだです」。そう話す彼らのつくったものは、私がそれまで仕事で見てきた多くのシステムより、よほどよくできていました。

だったら、機会をつくればいい。それが高専ベンチャーの始まりです。

あれから14年、私たちは高専生・高専出身のエンジニアと一緒に、ゲームや学習サービスをつくり、企業のAI・DXや地域の課題に取り組み、海外での事業にも挑戦してきました。開発拠点を兼ねた寮には、全国の高専から100名ほどの学生がインターンに来てくれました。その中で、高専生の驚くような力と、その力が十分に生かされていない現実の両方を見てきました。

そして今、生成AIの登場によって、エンジニアの仕事は大きく変わろうとしています。私は、この変化は高専生にとって大きな追い風になると考えています。ただし、それは教育や社会の側が、高専生の力を生かす準備をしたときに限られます。

この提言書は、その現場で見てきたことをもとに、高専生の力をもっと社会で生かすために何が必要かをまとめたものです。高専の先生方、高専生を迎える企業や自治体の方、そして高専生自身に読んでいただければ幸いです。

2026年11月
高専ベンチャー株式会社 代表取締役　澤木陽太郎

第1章　高専とは何か――15歳から「つくる」を学ぶ学校

15歳からの5年間一貫教育

高等専門学校（高専）は、中学校を卒業した15歳から、5年間の一貫教育で実践的な技術者を育てる学校です。1962年に最初の国立高専が設立されて以来、日本のものづくりを支える技術者を送り出してきました。現在は国立51校を含め、国公私立あわせて全国に58校あり、約6万人が学んでいます〔出典1〕〔出典3〕。

高専の最大の特徴は、早い時期から専門の学びが始まり、実験・実習が多いことです。普通の高校生が受験勉強をしている時期に、高専生は回路を組み、プログラムを書き、機械を動かしています。大学受験がないぶん、5年間をまるごと専門の学びとものづくりに使えるのです。

ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、デザインコンペティションなど、全国規模の競技会も高専文化の大きな柱です。チームで目標を決め、限られた期間と予算でものをつくり、本番で結果を出す。この経験は、実際の仕事の進め方とほとんど同じです。

産業界からの高い評価

卒業後は約6割が就職し、約4割が大学への編入学や専攻科に進みます。令和6年度の本科卒業者の平均求人倍率は約30倍にのぼります〔出典2〕。卒業生一人に対して30社が求人を出している計算で、高専生は「採りたくても採れない人材」と言われ続けてきました。文部科学省の検討会も、高専卒業者の自主性、実践力が産業界から高く評価され、マネジメント部門や幹部候補として活躍する例が増えていると述べています〔出典2〕。

情報・AIへの広がりと、世界の「KOSEN」

高専の学びは、機械・電気・化学・建設といった従来の工学分野から、情報やAIを含む分野へと広がっています。国立高専機構は、AI・数理データサイエンス、ロボット、IoT、サイバーセキュリティ、半導体などの分野で、新しい技術を各学科の専門教育に取り入れる取り組み（COMPASS 5.0）を令和2年度から進めています〔出典4〕。

日本の高専の仕組みは、海外からも注目されています。モンゴルでは2014年に日本の高専をモデルにした教育が始まり、2016年には高専型教育に関する法律も定められました。タイでは2019年に、日本型の高専教育を本格的に取り入れた同国初の高専（KOSEN-KMITL）が開校し、2020年には2校目も生まれています。ベトナムでも、国立高専機構が教員の派遣などを通じて導入を支援しています〔出典14〕〔出典15〕。「KOSEN」は、日本が世界に示せる教育モデルの一つになりつつあるのです。

それでも残る課題

制度としての高専は、国内外で高い評価を受けています。それでも私は、高専生の力はまだ十分に生かされていないと感じています。文部科学省の検討会も、卒業生の地元への定着や、高専そのものの認知度など、課題が残ることを指摘しています〔出典2〕。次の章から、その理由を、私が現場で出会った学生たちの姿を通してお話しします。

第2章　14年間の現場で出会った高専生たち

高専ベンチャーの歩み

年	できごと
2012年3月	東京・綾瀬でプロジェクトを開始し、研究型オフィスを開設。高専生との開発合宿から始まる
2014年9月	千葉・木更津に開発拠点を開設
2015年4月	東京・神田に本社オフィスを開設
2015年7月	高専ベンチャー株式会社を設立
2017年9月	東京・南千住に、開発拠点を兼ねた寮「弦本寮」を開寮（現在は活動を終了）
現在	AI・DX支援、地方創生支援、海外事業支援（UAE・タイ・パキスタン）へと活動を広げる

この間、高専生・高専出身のエンジニアとつくったゲームや学習サービスは17作品になります。石見神楽を題材にした音楽ゲーム「夜神楽」のように、地域の文化を伝える作品もあります〔出典5〕。

ここからは、私が出会った高専生の中から、特に印象に残っている人たちを紹介します。いずれも本人が特定されないよう、学校名などは伏せています。

事例1　ほしいゲームが買えないから、自分でつくった学生

四国のある高専の学生の話です。

彼には、どうしても遊びたいゲームがありました。しかし、学生のお小遣いでは手が届きません。普通なら、あきらめるか、親にねだるか、お金を貯めるところでしょう。

彼が選んだのは、そのどれでもありませんでした。「だったら、自分でつくればいい」。授業で学んだプログラミングを手がかりに、足りない知識は自分で調べ、彼は本当に、遊びたかったゲームに近いものを自分の手でつくり上げてしまいました。

この話を聞いたとき、私は高専生の強さの根っこを見た気がしました。「ないものは、自分でつくる」。この発想が、誰に教えられるでもなく自然に出てくるのです。

世の中の多くの人は、何かが足りないとき、それを「買う」か「誰かに頼む」ことを考えます。高専生は、それを「つくる」ことを考えます。この差は、AIの時代にますます大きな意味を持つようになります。AIという強力な道具が手に入った今、「自分でつくる」発想を持つ人が、つくれるものの幅は格段に広がっているからです。

事例2　素晴らしいアプリをつくったのに、世に出させてくれなかった学生たち

これは一人の話ではありません。中国地方の高専の学生と、東京の高専の学生、それぞれとの間で、よく似たことが起きました。

二人とも、非常に完成度の高いアプリをつくりました。私たちから見れば、すぐにでも公開して、販売できる出来でした。「これを世に出そう」と提案すると、返ってきた答えは同じでした。「自分ではまだ納得できていないので、出したくないです」。

どこが足りないのかと尋ねると、私たちには気にならないような細かな動きや、使う人がほとんど気づかないような部分の作り込みでした。説得を重ねましたが、彼らは最後まで首を縦に振りませんでした。

ものづくりへの誠実さと、妥協しない姿勢。これは間違いなく、高専生の美点です。粗いものを世に出して平気でいる人より、ずっと信頼できます。

一方で、私は惜しいとも感じました。実際の仕事では、「完璧になってから出す」ことはまずありません。まず世に出し、使ってもらい、意見を聞きながら直していく。そうすることで初めて、つくり手が気づかなかった価値や課題が見えてきます。彼らに、「出して、直す」経験を積む機会がもっと早くあれば、その力はさらに大きく花開いたはずです。

この事例は、高専生の強さと課題が、実は表裏一体であることを教えてくれます。作り込む力は、外の世界とつながったときに、初めて本当の価値になるのです。

事例3　インターンに夢中になり、そのまま企業の正社員になった学生

四国のある高専の3年生の話です。

彼は、インターンとして実際の開発プロジェクトに参加しました。最初は簡単な作業から始めましたが、すぐに頭角を現し、任される範囲がどんどん広がっていきました。自分の書いたコードが実際のサービスとして動き、使う人の役に立つ。その手応えに、彼は夢中になっていきました。

インターンが楽しくなりすぎた彼は、最終的に高専を中退する道を選びました。そして、そのまま大手のIT企業に正社員として採用されたのです。3年生、まだ17〜18歳のときでした。

本番の開発を任されたとき、高専生がどれだけ伸びるか。彼はそれをはっきりと示してくれました。高専で学んだ基礎と、本番の仕事の経験が組み合わさったとき、学年や年齢は関係なくなります。

同時に、私はこの事例を手放しで喜ぶことはできませんでした。在学中の挑戦と学業を両立できる仕組みがあれば、彼は中退という選択をしなくてもよかったのかもしれません。高専の5年間には、仕事の現場では得られない学びもあります。「学校か、挑戦か」の二択を迫らない仕組みが必要だと、強く感じたきっかけでした。

弦本寮の100人

2017年、私たちは東京・南千住に、開発拠点を兼ねた寮「弦本寮」を開きました。主に夏休みと春休みに、全国のさまざまな高専から学生が1か月ほど滞在し、インターンとして開発に取り組みました。利用した高専生は、最終的に100名ほどになります。

寮では、北海道の高専の学生と九州の高専の学生が、同じ机で同じプロジェクトに取り組みます。学校が違えば、得意な分野も、学んできた道具も違います。最初はお互いに遠慮していても、数日もすれば夜遅くまで技術の話で盛り上がるようになりました。

多くの学生が口にしたのは、「自分の学校の外にも、こんなにすごい人がいるのか」という驚きと、「自分も意外と通用する」という発見でした。外の基準に触れることで、学生は自分の力を正しく知ることができる。弦本寮での経験は、第5章で述べる提言の原点になっています。

高専の先生方の言葉

私たちが行ったインタビューでも、高専生の強さについて印象的な言葉をいただきました。

茨城高専の元教授、三好章一さんは、高専生は「目的意識がはっきりしている」と言います。高校ではなく高専を選んだ時点で、多くの学生が自分なりの理由を持っているからです。一方で三好さんは、5年間、時には7年間、専門の勉強に打ち込むうちに視野が狭くなりやすいことも指摘し、だからこそ授業の外でさまざまな経験をする「遊び」が大切だと語っています〔出典6〕。

都立航空高専の元校長、島田一雄さんは、世代を超えた高専OBのネットワークが、高専の大きな可能性だと語ってくださいました。60代の大先輩から若いOBまでが力を合わせ、後輩の高専生を支える。そのつながりは、高専にしかない財産です〔出典7〕。

第3章　AI時代に、なぜ高専生が強いのか

AIが変えたもの、変えないもの

生成AIの登場で、プログラムを書く作業そのものは、以前よりずっと速くなりました。仕様を伝えれば、AIがコードの下書きを書いてくれる。分からないことを聞けば、すぐに答えが返ってくる。では、エンジニアの価値は下がるのでしょうか。私はむしろ逆だと考えています。

AIが速くしてくれるのは、主に「書く」ところです。一方で、次のような部分は、今もこれからも、人が担います。

- 何をつくるべきかを、現場の困りごとから決める
- 小さくつくって、実際に動かして確かめる
- AIが書いたものが正しいかを見極め、責任を持つ
- 使われながら、直し続ける

そしてこれは、15歳から実験と実習で鍛えられてきた高専生が、最も得意とするところです。高専生は、教科書の答えを覚えるのではなく、「動くものをつくる」ことで学んできました。AIが書いたコードが動かないとき、原因を探し当てる力。現場の人の話を聞いて、何が本当に必要かを見抜く力。こうした力は、AIが普及するほど価値が上がります。

実例：3〜4人で半年の仕事を、1人で3か月

私たちは今、沼津高専の出身のエンジニアと一緒に、生成AIを使った開発に取り組んでいます。

最近、地方のクリーニング工場向けに、業務管理のアプリをつくりました。受け付けから工場での作業、お客様への受け渡しまでの流れを管理する仕組みです。

これまでのやり方なら、エンジニア3〜4人で半年ほどかかる規模の開発でした。それを、生成AIを使いこなしながら、1人で3か月ほどで完成させることができました。人数と期間をかけ合わせると、必要な手間はおよそ6分の1から8分の1になった計算です。

ここで大事なのは、AIが自動で全部をつくったわけではない、ということです。工場で働く人に話を聞き、作業の流れを理解し、何を優先してつくるかを決めたのは人間です。AIが書いたコードを確かめ、現場で試し、使いにくいところを直していったのも人間です。AIは強力な道具ですが、それを使って「現場で役に立つもの」に仕上げたのは、高専で鍛えられた「つくる力」でした。

地方の中小企業こそ、恩恵が大きい

この実例には、もう一つ大事な意味があります。これまで、地方の中小企業にとって、自社専用のシステムをつくることは、費用の面で現実的ではありませんでした。数人のエンジニアを半年動かすには、大きな投資が必要だからです。

AIによって開発の手間が大きく減れば、これまで手が届かなかった地方の中小企業も、自社に合った仕組みを持てるようになります。そして、その開発を担うのに最もふさわしいのが、全国に散らばる高専で学んだ人たちだと私は考えています。地域の産業を知り、現場の人と話ができ、AIを使って速くつくれる。高専生は、地方のDXの担い手になれるのです。

高専ベンチャーの進め方

高専ベンチャーでは、仕事を「聞く→試す→つくる→根づかせる」の4つの段階で進めています。いきなり大きなシステムをつくるのではなく、まず小さくつくって効果を確かめ、うまくいったものを広げていく。高専生・高専出身のエンジニアは、このすべての段階で力を発揮してきました。AIを道具として使いこなせば、高専生一人ひとりがつくれるものの幅は、これまでよりはるかに広がります。

第4章　それでも、力が生かされていない理由

高い評価を受けながら、なぜ高専生の力は十分に生かされていないのか。現場で見てきた課題を4つ挙げます。

1. 外の世界を知らず、「どうせ自分たちは」と思ってしまう

1年生の段階で、驚くほど優秀な学生がいます。しかし、学校の外の人や企業と接する機会がほとんどないため、自分の力が外の世界でどれほど通用するのかを知りません。

私が特に気になったのは、学年が上がるにつれて生まれる空気です。3〜4年生になると、後輩ができます。その中で、上級生が「これは高専病だから」と冗談めかして言いながら、「どうせ高専生なんて」「頑張っても仕方ない」という空気を後輩に伝えてしまう場面を、何度か目にしました。悪気はないのかもしれません。しかし、入学したばかりの意欲ある1年生が、その空気の中で少しずつやる気を失っていくのは、とてももったいないことです。

対照的だったのが、学校の外に出て、インターンや課外活動に取り組んでいる学生たちです。彼らは、企業の人や他校の学生と関わる中で、自分の力が外の世界で通用することを知っています。自分の価値が見えているから、次の挑戦にも前向きになれる。同じ高専の中でも、外との接点があるかないかで、学生の表情はまるで違いました。

2. 5年間同じクラスで、一度ついた「順位」から抜け出せない

高専では、多くの場合、5年間クラスが変わりません。40人ほどの同じ仲間と、15歳から20歳までを一緒に過ごします。

これには大きな良さがあります。人間関係が深まり、困ったときに助け合える仲間ができる。高専の卒業生が、何十年たっても同級生とのつながりを大切にしているのは、この5年間があるからでしょう。

一方で、一度クラスの中で下のほうの位置になると、その位置づけが固定されやすいという面もあります。クラスの中で比べれば下のほうでも、外の基準で見れば十分に優秀な学生は少なくありません。しかし、比べる相手がクラスの40人しかいないため、「自分はできないほうだ」と思い込み、自尊心を下げてしまう。この傾向が強いと感じます。

3. 地元の求人が減り、県外への就職が増えているのに、準備が追いついていない

高専卒業生の地元就職率（高専がある都道府県内の企業への就職）は、全国で21.6%にとどまります（令和6年度卒業者）。文部科学省の検討会も、専門性の高い高専卒業生は、雇用条件のよい大都市圏の企業に就職する傾向が強いと指摘しています〔出典2〕。

特に北海道・東北・日本海側の高専は、もともと地元の産業を支える中堅技術者の育成を大きな役割としてきました。しかし、各校が公表している数字を見ると、卒業生の多くが県外（道外）に就職しています。

高専	対象	地元（県内・道内）への就職
八戸高専	令和7年度 本科卒業者	就職者82人のうち青森県内は4人。55人が関東地区〔出典9〕
苫小牧高専	令和6年度 本科	就職者121人のうち道内36人（約3割）〔出典10〕
旭川高専	令和5年度 本科	就職者72人のうち道内25人（約3割）〔出典11〕
富山高専	過去5年の平均	就職者のうち県内は約3割〔出典12〕

求人の面でも同じ傾向があります。福井高専では、令和7年度の本科への求人7,713件のうち、県内企業からの求人は469件（約6%）で、9割以上が県外企業からでした〔出典13〕。

多くの学生が、住み慣れた地域を離れ、まったく違う環境で働き始めています。しかし、そのための準備――都市部の企業で働くとはどういうことか、自分の力がどこで通用するのかを知る機会――は、十分とは言えません。私たちの就職支援でも、「思っていたのと違う」というずれに悩む声を聞いてきました。

4. AIを「使ってつくる」実践の機会が足りない

機構全体でAI・数理データサイエンスの教育は進んでいます〔出典4〕。しかし、実際の仕事の現場で生成AIを使い、短い期間でサービスをつくり上げる、といった実践の経験は、まだ多くの学生に行き届いていないと感じます。

第3章で紹介したように、現場ではすでに、AIを前提にした開発が当たり前になりつつあります。企業の現場の変化は非常に速く、学校の教育が追いつくのは簡単ではありません。しかし、この差が開いたままだと、高専生が社会に出たとき、最初の数年をAIの使い方を学び直すことに費やすことになります。せっかくの「つくる力」が、道具の差で生かされないのは、本当にもったいないことです。

4つの課題に共通すること

4つの課題を並べると、共通する原因が見えてきます。それは、「外の世界との接点が少ない」ということです。外を知らないから、自分の力を低く見積もってしまう。外の基準がないから、クラスの中の順位に縛られる。外で働く準備ができていないから、就職後にずれが生まれる。外の現場の変化が、教育に届くのに時間がかかる。

裏を返せば、外の世界との接点を増やすことで、4つの課題はまとめて解決に向かうはずです。次の章では、そのための具体的な提言を述べます。

第5章　5つの提言

提言1　AIを「使ってつくる」実践型の教育を増やす

なぜ必要か

AIの仕組みや理論を学ぶことは大切です。しかし、それだけでは、現場で求められる力にはなりません。今、現場で求められているのは、AIを道具として使いこなし、短い期間で実際に動くものをつくる力です。第3章の実例のように、AIを使いこなすことで、一人のエンジニアがつくれるものの幅は大きく広がります。

具体的に何をするか

- 企業や地域の実際の課題を題材に、生成AIを使って短期間（2週間〜1か月）でアプリやサービスをつくる課題を、授業に取り入れる。
- AIが書いたコードを読み、正しさを確かめ、直す力を、評価の対象にする。
- AIの使い方を学ぶだけでなく、「AIに何を任せ、何を人がやるか」を考える機会をつくる。

誰が

- **高専・先生方**：課題の設計と評価の仕組みづくり
- **企業・自治体**：自社や地域の現場の課題を、教材として高専に提供する。完成したものを実際に使ってみる

最初の一歩

1つの学科の1つの授業で、地域の企業の課題を1つ題材にした「AI実践課題」を試してみる。

高専ベンチャーの取り組み

リモートで参加できる長期インターンで、高専生が実際のサービスの企画・開発・テストに関わっています。生成AIを使った開発の進め方も、実務の中で一緒に学んでいます。

提言2　英語の教育にもっと力を入れる

なぜ必要か

地元の求人が減り、企業の海外展開が当たり前になった今、高専生が活躍する場所は日本の中だけではありません。最新の技術情報の多くは英語で発信され、開発の現場では海外のエンジニアと一緒に仕事をすることも珍しくありません。海外では日本型の高専教育を取り入れる国も出てきており〔出典14〕、高専生が海外の「KOSEN」の学生と一緒に学ぶ機会も生まれています。

具体的に何をするか

- 技術の授業の中で、英語の資料を読み、英語で発表する機会をつくる。
- 海外の学生やエンジニアと、オンラインで一緒に取り組む課題をつくる。
- 留学を前向きな挑戦として応援する。

前向きな留年という考え方

私が印象に残っているのは、豊田高専の例です。豊田高専では留学する学生が多く、留学のために学年が1年遅れる「前向きな留年」が、当たり前のこととして受け入れられていると聞きました。学生は、卒業が遅れることを恐れずに、海外での挑戦を選べます。こうした考え方が、他の高専にも広がることを願っています。

誰が

- **高専・先生方**：英語を使う機会の設計、留学への理解
- **企業**：英語力や海外経験を、採用で正しく評価する

高専ベンチャーの取り組み

UAE・タイ・パキスタンでの事業を通じて、海外と一緒に開発する場をつくっています。

提言3　外の世界に触れ、自分の位置を知る機会を増やす

なぜ必要か

第4章で見たとおり、高専生の課題の多くは、「外の基準」を知らないことから生まれています。企業の人、他の高専の学生、大学生、海外の若者と触れ合うことで、学生は自分の力がどこまで通用するのかを知ることができます。外に出て活動している学生が、自分の価値を知り、次々と挑戦していく姿を、私は何度も見てきました。三好さんが言う「遊び」、つまり授業の外でさまざまな経験をすることは、視野を広げるうえで大きな意味があります〔出典6〕。

具体的に何をするか

- 1〜2年生のうちから参加できる、会社見学や短期インターンの機会を増やす。
- 他の高専や大学の学生と一緒に取り組む、学校をまたいだプロジェクトをつくる。
- 学外での活動を、授業と同じように単位や評価の対象にする。
- 卒業生（OB・OG）が後輩と関わる場を増やし、「外の世界の先輩」の姿を見せる。

誰が

- **企業・地域**：低学年から参加できる機会を開く
- **高専・先生方**：学外での活動を評価する仕組みをつくる
- **卒業生**：後輩と関わり、外の世界の姿を伝える

最初の一歩

上級生の「どうせ」という空気を変えるのは、外の世界を知った先輩の言葉です。インターンや課外活動を経験した上級生が、後輩に自分の経験を話す場を、まず一つつくってみる。

提言4　優秀な学生が、在学中から本気で挑戦できる機会を増やす

なぜ必要か

第2章の事例3のように、本番の開発を任されたとき、高専生は大きく伸びます。しかし今は、本気で挑戦しようとすると、「学業をやめる」という選択を迫られることがあります。挑戦したい学生が、学校を離れずに挑戦できる仕組みが必要です。

具体的に何をするか

- インターンや起業、留学のための休学を、柔軟に認める。
- 企業での開発や、自分で立ち上げたプロジェクトの成果を、単位として認める。
- 優秀な学生が、学年にとらわれずに難しい課題に挑戦できる場をつくる。

誰が

- **高専・先生方**：休学や単位認定の仕組みを整える
- **企業**：インターンを「お手伝い」で終わらせず、小さくても本番の開発を任せる。学業との両立に配慮する

高専ベンチャーの取り組み

インターン生がそのまま企業に採用された例があります。また、私たちがインタビューした寺本大輝さんのように、高専卒業後に就職や進学ではなく起業を選んだ人もいます〔出典8〕。挑戦する学生を応援し、その挑戦が学業と両立できるよう、学校と企業の橋渡しをしていきます。

提言5　寮を生かして、学期ごとに他の高専で学べる「国内留学」をつくる

なぜ必要か

5年間同じクラスにいることで、人間関係や「順位」が固定されやすくなります。一方で、多くの高専には寮があり、全国に58校の高専のネットワークがあります〔出典1〕。この二つを組み合わせれば、学生が一定の期間、別の地域の高専で学ぶ「国内留学」が実現できるはずです。

どんな仕組みか（モデル案）

項目	内容
期間	3か月から1年。学期（セメスター）ごとに選べる
対象	主に3〜4年生（専門の基礎を学んだ学年）
行き先	全国の高専から選ぶ。都市部の高専と地方の高専の行き来を特に勧める
住まい	行き先の高専の寮
費用	**どの高専の寮に住んでも、在籍校の寮と同じ費用**とし、学生に追加の負担をかけない
単位	行き先の高専で取った単位を、在籍校の単位として認める
内容	行き先の高専の授業に加え、その地域の企業や自治体の課題に取り組むプロジェクトを組み合わせる

期待できること

- 都市部の高専の学生が地方で地域の課題に取り組み、地方の高専の学生が都市部の企業と関わる。お互いの地域を知ることで、就職後の「思っていたのと違う」を減らせる。
- 5年間同じクラスにいることで固定されがちな人間関係や「順位」から、一度離れて自分を見つめ直す機会になる。
- 学校ごとに異なる得意分野や設備を、全国の学生が生かせる。
- 第4章で見た地元就職の課題に対しても、地方の高専に都市部の学生が来ることで、地方の企業が新しい人材と出会うきっかけになる。

費用についての考え方

国内留学が「経済的に余裕のある学生だけのもの」になっては意味がありません。寮費を全国で同じにし、追加の費用がかからないようにすることが、この仕組みの前提です。行き先の寮の部屋は、同じ期間に行き先から出ていく学生の部屋と入れ替える形にすれば、寮全体の定員を増やさずに実施できます。

高専ベンチャーの経験

弦本寮には、主に夏休みと春休みに、全国のさまざまな高専から学生が1か月ほど滞在し、インターンとして開発に取り組みました。利用した高専生は、最終的に100名ほどになります。違う高専の学生が同じ屋根の下で暮らし、一緒にものをつくる経験は、学生たちの視野を大きく広げました。わずか1か月でもこれだけの変化があるのですから、3か月から1年の国内留学が実現すれば、その効果ははるかに大きいはずです。

5つの提言の関係

5つの提言は、別々のものではありません。

提言	主に解決する課題（第4章）
1. AI実践型の教育	4. AIを使ってつくる機会の不足
2. 英語教育	3. 県外・海外で働く準備の不足
3. 外の世界に触れる	1.「どうせ自分たちは」、2. クラスの中の順位
4. 在学中の挑戦	1.「どうせ自分たちは」
5. 寮を生かした国内留学	2. クラスの中の順位、3. 県外で働く準備の不足

どれも、根っこにあるのは「外の世界との接点を増やす」ことです。一つから始めても、ほかの提言につながっていきます。

第6章　高専ベンチャーがこれから取り組むこと

提言は、言うだけでは意味がありません。高専ベンチャーとして、これから次のことに取り組みます。

1. AIを使った開発インターンを広げる

第3章で紹介したAIを使った開発の進め方を、高専生のインターンでも実践します。リモートで参加できる形を続け、地方の高専の学生も、住んでいる場所に関係なく参加できるようにします。

2. 地方の中小企業と高専生をつなぐ

クリーニング工場の業務管理アプリのように、地方の中小企業の課題を、高専生・高専出身のエンジニアがAIを使って解決する事例を増やします。地方の企業にとっては手の届く費用でのDXになり、高専生にとっては地域の企業を知る機会になります。

3. 海外とつながる機会をつくる

UAE・タイ・パキスタンでの事業を通じて、高専生が海外の企業や学生と一緒に取り組むプロジェクトをつくります。

4. 高専・企業・自治体との対話

この提言書をきっかけに、高専の先生方、企業、自治体の方々と対話を重ね、提言を一つずつ形にしていきたいと考えています。特に、提言5の国内留学は、一つの高専だけでは実現できません。関心を持っていただける高専や自治体があれば、ぜひ一緒に検討させてください。

おわりに

高専生は、AIの時代にこそ力を発揮できる人材です。ないものは自分でつくり、納得いくまで作り込み、本番を任されれば驚くほど伸びる。私は14年間、その姿を見てきました。

足りないのは、能力ではなく機会です。外の世界に触れる機会、本気で挑戦できる機会、そしてAIを使って実際につくる機会。それをつくるのは、高専だけでなく、企業や地域、そして私たち大人の役割だと考えています。

2012年に出会った5人の高専生は、「自分なんて、まだまだです」と言っていました。今、全国の高専で学ぶ約6万人の学生が、自分の力を正しく知り、胸を張って社会に出ていける。そんな未来をつくりたいと思っています。

「若いエンジニアが活躍する世の中をつくる」。創業のときから、目指すところは変わっていません。この提言書が、高専生の新しい機会を生むきっかけになれば幸いです。

ご意見・ご相談は、高専ベンチャーのお問い合わせフォームからお寄せください。
https://kosen-venture.com/

著者紹介

澤木陽太郎（さわき ようたろう）

高専ベンチャー株式会社 代表取締役／CY株式会社 代表取締役社長／株式会社estoma 役員

大学卒業後、株式会社リクルートに入社し、不動産関連広告事業での法人営業、開発業務、経営企画室を経験。独立後、2012年から高専生とともに開発プロジェクトに取り組み、2015年に高専ベンチャー株式会社を設立。高専・高専生の支援を軸に、企業や自治体のAI・DX支援、地方創生、海外事業支援（UAE・タイ・パキスタン）、行政向けの研修講師を手がけている。

CY株式会社 代表取締役社長として、ITエンジニア専門の結婚相談所 Code For Marriage を運営。株式会社estoma 役員として、ESG情報の統合管理クラウドの事業開発に携わる。

出典

1. 文部科学省「高等専門学校（高専）について」 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kousen/
2. 文部科学省 高等専門学校の機能強化に関する検討会「高等専門学校の機能強化に関する中間整理」（令和8年8月28日）1ページ・7ページ（卒業後の進路、平均求人倍率 約30倍＝令和6年度本科卒業者、地元就職率21.6%＝令和6年度卒業者、産業界からの評価、課題） https://www.mext.go.jp/content/20260909-mxt_koutou01-000051907_3.pdf
3. 国立高等専門学校機構「KOSEN 概要 2026」 https://www.kosen-k.go.jp/wp/wp-content/uploads/2026/08/gaiyo2026.pdf
4. 国立高等専門学校機構「高専発！Society 5.0型未来技術人財育成事業（COMPASS 5.0）」関連資料 https://asahikawa-nct.ac.jp/compass/images/Society50_KOSEN_COMPASS5.0.pdf
5. 高専ベンチャー株式会社 制作実績 https://kosen-venture.com/
6. 高専ベンチャー インタビュー「高専を語る」VOL.1 三好章一さん（元 茨城高専 教授） https://kosen-venture.com/2024/08/12/interview1/
7. 高専ベンチャー インタビュー「高専を語る」VOL.2 島田一雄さん（都立航空高専 元校長） https://kosen-venture.com/2024/08/12/interview2/
8. 高専ベンチャー インタビュー VOL.4 寺本大輝さん「起業と言う選択」 https://kosen-venture.com/2024/08/12/interview4/
9. 八戸工業高等専門学校「進路状況（地域別就職状況 令和8年3月卒業者）」 https://www.hachinohe-ct.ac.jp/careers/transfer.php
10. 苫小牧工業高等専門学校「統計情報」 https://www.tomakomai-ct.ac.jp/information/disclosure/statistics
11. 旭川工業高等専門学校「進路状況」 https://www.asahikawa-nct.ac.jp/guide/career/
12. 富山高等専門学校「進路状況」 https://www.nc-toyama.ac.jp/career/course/
13. 福井工業高等専門学校「求人状況」 https://www.fukui-nct.ac.jp/employ-adm/job-offer/
14. 文部科学省「科学技術・イノベーション白書」第4章 地域に密着した全国の高等専門学校による科学技術・イノベーション https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa202301/1421221_00006.html
15. 文部科学省 EDU-Portニッポン 資料「国立高等専門学校機構の取組」（モンゴル・タイ・ベトナムでの高専型教育の導入） https://www.eduport.mext.go.jp/epsite/wp-content/uploads/2021/03/jishihoushin_d1_shiryo5_koutou.pdf